

保健室登校ということばが注目されはじめた九〇年代初頭、子どもたちの悩みを真正面から受けとめられる場として、保健室という学校の片隅がにわかに脚光をあびるようになった。当時、文部省がはじめて実施した調査をまとめた「保健室利用者調査報告書」（日本学校保健会、一九九二）のまえがきには、「心の居場所」を提供すべく、「児童生徒の状態を温かく受け入れ、早期に総合的に状況を判断し、適切な対応が出来ることは、児童生徒のもつ問題を早期に、かつ適切に解決することにつながります……」（傍点は秋葉）とある。まずもって「温かく受け入れ」ることが出来る場所——保健室・養護教諭は、その温かさで注目されたのである。

ならば、その温かさとは何か？ どこからくるのか？ どうして保健室では悩みを相談しやすいのか？ 保健室で悩みを相談しやすいのは成績をつけにくいからだ、といったわかりやすい説明も繰り返し返し登場したが、温かさの説明としてはわかり

り、眠る……。それだけをみて、それらが「母」、「おばちゃん」に甘えてのことなのだと説明されれば、たしかにそんな風にもみえてしまう。しかしそのメカニズムはじつのところ、とても組織立っている。身体トラブルを抱えて子どもが来室するやいなや、養護教諭が「どうしたの」と声をかける。頭痛、腹痛、打撲、捻挫、切り傷、擦り傷等の症状が訴えられる。養護教諭は、子どもたちに対して、仮病だろうか？ などとはまず言わない。そうではなくて、いつ、どこで怪我をしたのか、いつからおなか痛いのか、昨日の夕飯は何を食べたのか等々を訊ねていく。問診である。具合が悪くて来室するのだから、子どもの側もたいいてい素直に話す。話しにくそうであれば、養護教諭の側で話しやすいように訊き直したりもする。実際のやりとりの構造を会話分析すればはつきりわかることだが、それらはあくまで適切な治療、処置をするためである。しかし悩み相談が始まる

にくい。私が保健室にフィールドワークに出向いたときのこと、ある養護教諭は、「子どもたちは私に母親の役割を求めているんです」と言った。また別のベテラン養護教諭は、自らを「保健室のおばちゃん」といい、「そう言ってみんな甘えにくるのねー」と目を細め、情感を込めて「あつたかい対応をしてあげる」のだと言っていた。「母親」、そして「保健室のおばちゃん」——当の養護教諭たちは、これら女性性のメタファーをもって保健室での対応の特長を説明することしばしばであった。それは、温かさに関するひとつの可能な説明として、部外者にとっても、当の養護教諭にとってもわかりやすい。

しかし私にはむしろ、保健室では、子どもたちに温かさを感じさせ、悩みを打ち明けさせてしまうような「母親」、「おばちゃん」的な対応が実際どんな風に成り立っているのかが気になっていた。保健室に来室してから帰っていくまで、子どもたちは泣き、訴え、つっぱり、騒ぎ、自慢し、チクとすれば、それはほぼこの問診の途中のことである。「部活のとき××されて」怪我をしたとか、「これも、あれもしなくちゃって寝不足して風邪引いちゃった」と話すうちにパニックって涙ぐんだり、「実はこの打撲さ、××中学の××と殴り合いになってさあー」と武勇伝を語りだしたり……。いろいろ聞いたうえで（あるいは聞きながら）養護教諭は治療をし、あるいは「これ以上身体を壊さないためにもくしなさい」などと言い、あくまで子どもの身体トラブルの治療、応急手当、身体トラブルを回避するための生活習慣のアドバイスをする。学校のこと、友達のこと、家族のこと……。どんなことも子ども自身の身体、いわばもつとも身近に感覚できる自分の核にアプローチしてくる養護教諭。「母」の愛、「おばちゃん」の温かさ、これらはみな保健室での組織立った対応の構造にこそ由来しているのだろう。